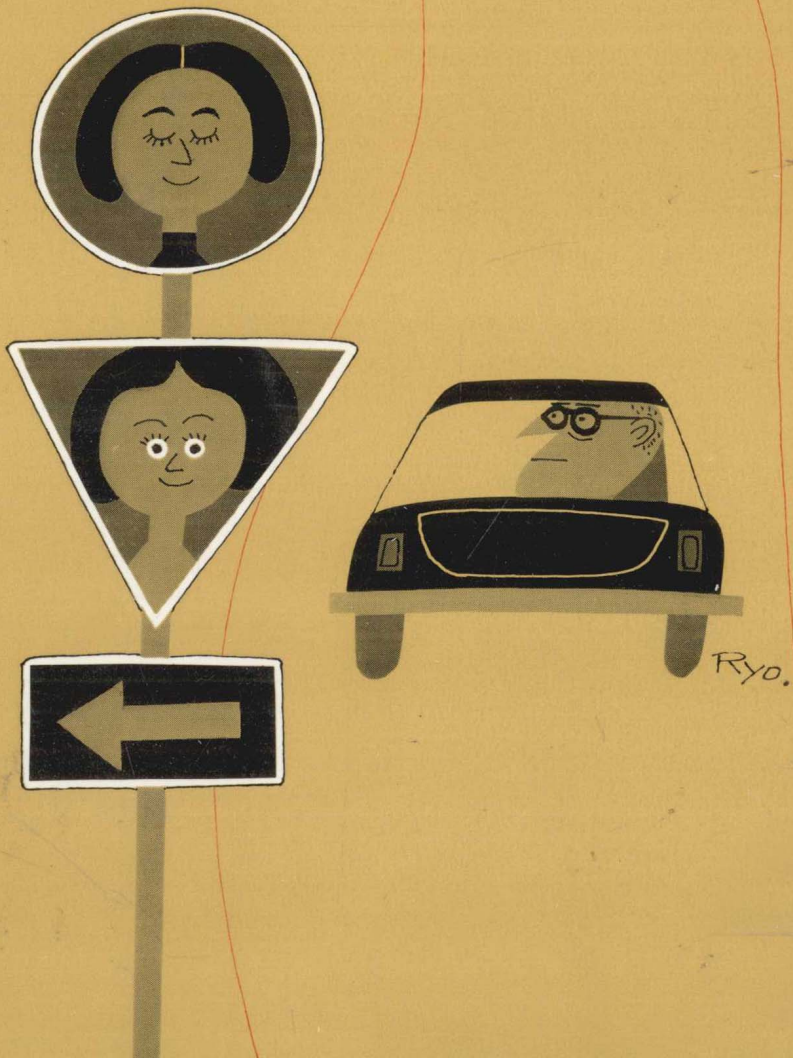
人生仮免許

男性自身シリーズ

山口瞳

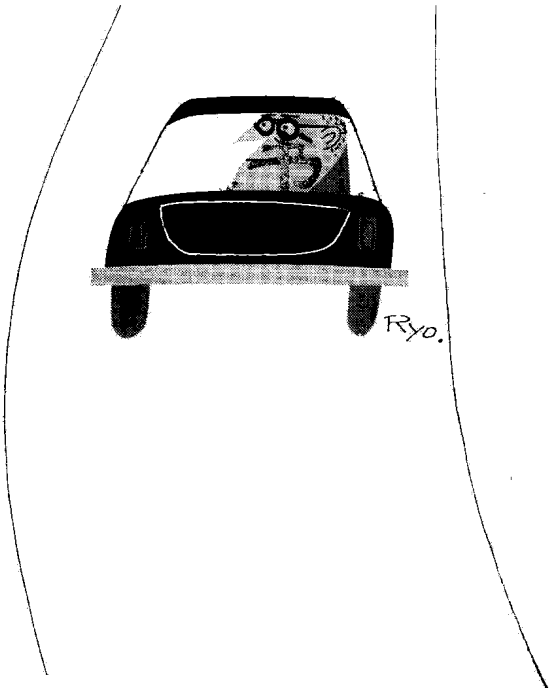


人生仮免許

男性自身シリーズ

山口 瞳

新潮社



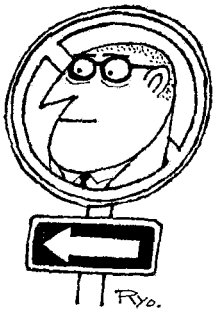
人生仮免許（じんせいかりめんきょ）■男性自身シリーズ14　■定価七五〇円
昭和五十三年十一月三十日印刷　昭和五十三年十二月五日発行

© Hitomi Yamaguchi, Printed in Japan, 1978.

著　者――山口瞳（やまぐちひとみ）
発行者――佐藤亮一
発行所――株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一　郵便番号＊一六二
電話＊業務部　東京（〇三）二六六一―五一一一
編集部　東京（〇三）二六六一―五四一一
振替＊東京四―六〇八
印刷所――二光印刷株式会社　製本所――株式会社大進堂

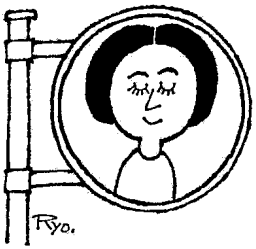
＊乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

＊目次＊＊＊



五月十一日 9
相撲の帰り 14
水彩画 20
ホテル 25
ジーンズ 30
人生仮免許 35
どうしましょう 40
ジーパンを買う 46
梅雨あけの頃 51
旅先きの酒場で 57
御施餓鬼 63
今年の甲子園大会 69
盆踊り 74

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com



旅心 79
捕虫網の使用法 84
素朴な画家の一日(一) 89
素朴な画家の一日(二) 94
女にモテルには 99
十五夜 104
修身復活 109
故障続き 114
人生五十年 119
競馬のこと 124
祇園まで 129
新幹線の富士 134
紅葉 139

柳原良平さん 144
年末友情篇 150
年頭所感 155
真率ということ 160
困ったなあ 165
『将棋名人戦全集』 171
花森安治さん(一) 176
花森安治さん(二) 181
読書について 186
ナマケモノ 191
ある講演会 196
幻想庭園 201
はからざりき 206

春の焚火 211
花の五十代 216
桜の頃 221
毀れた 226
煙草の話 231
行き詰った 236
展覧会 241
不自然 246
時雨るゝや 251
友人たち 256
ダービーのあと 262
裸になった女たち 267
暑気払い 272

装幀
カット　柳原良平

人生仮免許

男性自身シリーズ14

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

五月十一日

五月十二日の朝、目をさますと、新聞を取りに行った。私は、スポーツ紙だけを見た。貴ノ花は誰に負けて、若三杉は誰に勝ったのか調べる必要があると思っていた。相撲で言うと、それが四日目である。貴ノ花は、荒勢に負けたのだった。これで一勝三敗である。どうも荒勢にはアイクチが悪いようだ。若三杉は黒姫山に勝っていた。四連勝である。偉いものだ。

時計を見ると九時半である。もう、寝るわけにはいかない。「男性自身」の六百九十六回目の原稿を書かなければいけないからである。また、今日は相撲を見に行くことになっている。だから、どんなに遅くても、午後の二時までには書きあげなければならない。

そう思って、原稿用紙にむかったのだけれど、急に気分が悪くなって、吐いた。二度吐いて、しばらくして、また吐いた。吐いていて、自分で、吐くのは当然だと思っていた。

私は、午前五時まで、寝床のなかで『将棋世界』の六月号を読んでいた。カリン糖のよ

うなものを食べながら読んでいた。全部、食べてしまった。そのカリン糖のようなものは、柳原良平さんの奥さんに貰ったものである。

私は、午前三時まで、横浜の柳原良平さんの家で酒を飲んでいた。どうして、そんな時刻まで彼の家にいたかというと、「男性自身」の六百九十六回目に何を書いていいかわからないからだった。何を書くかということがきまらなければ、柳原さんが絵を描くことができない。それで、困ってしまって、グズグズとウイスキイを飲んでいた。

「おい、もうじき、七百回なんだぜ。七百回になるのに、まだ困っているのは、どういうわけなんだ。あと十時間ばかりのうちに原稿を渡さなくてはいけない。それで、原稿を書くのと絵を描くのと、二人で困っているなんて、こういうのはおかしいと思わないか。何か、書くことはないか。なにか面白い話はないか」

五月十一日は、梶山季之の三回忌だった。法要は、鎌倉の瑞泉寺で営まれた。それで、そのことを書けばいいのだけれど、昨日の今日で、なんだか、アザトイ感じがした。昨日の今日というより、私は、鎌倉へ行って、その帰りに横浜の柳原さんのところへ寄ったのである。こういうのは、なにか、巨人・阪神戦を見てきて、その晩のうちに観戦記を書くようで、気が進まない。

しかし、どうにも困ってきた。柳原さんは、それじゃあ、泊っていけと言う。そういうわけにはいかない。原稿を書く人が挿絵を描く人の家に、締切の日に泊るというのは変だ。前代未聞だと思った。原稿を取りにくる人が驚くと思った。

それで、仕方がないので、じゃあ、梶山の墓にウイスキイを注いでいるところを絵にしてくださいと言った。あるいは、私が線香をあげているところでもいいと言った。そうい

うことになったので、私が鉛筆で梶山の墓の絵を描いた。瑞泉寺には、梶山の師匠の大宅壮一さんの墓もある。大宅先生の墓より大きな墓にしてはいけないということで、すこし、ちいさめになっている墓である。

やっと解放されたような気分になってカリン糖みたいなものを貰って帰ってきた。だから、吐くのは当然なのである。

*

柳原さんの家へ行くまでは、横浜の関内(かんない)にある『倫敦』という酒場にいた。ロンドンといってもキャバレーではない。なかなか、いい店だった。関内にはいい店があると聞いていたが、私は、関内で飲むのは初めてだった。

一行は、長部日出雄さん、石堂淑朗さん、柳原良平さん、O中年、M青年、それに私であって、すなわち法事の帰りである。長部さんと石堂さんと私という組みあわせは、ちょっと陰気なところがある。だから、陽気な柳原さんがいてちょうどいい感じだった。

この店には、アメリカ人の娘が勤めていた。こういう席に外国人が一人いると、どうしても、彼女中心になる傾向がある。私なども、なんというか、外国人の話す日本語のようなアクセントになってしまう。長部さんは、「オー・イエース」というのと「ベリー・グッド」というのと、このふたつの言葉しか話さなかった。まったくその通りだというときは、大きな声で「オー・イエース」と言う。そうは思わないというときは、小さな声で「オー・イエース」と言う。これで通じてしまうから妙だ。石堂さんは黙っている。東京大学も早稲田大学も、語学に関しては、あまり自慢できないのではないかと思った。

この娘は、ピアノ弾きが「オー・スザンナ」を弾くと泣きだしてしまった。ホームシッ

クにかかっているのだという。それなら故郷へ帰ればいいのにと思う。彼女は日本見物にきて十カ月になるという。働きながら観光旅行しているわけだ。それで、泣きながら勤めている。どうも、若い女は、国の内外を問わず、シブトイところがある。

柳原さんは、今日は輪島が負けたと言った。誰に負けたかと訊くと、きみのように頭の禿げた力士に負けたと言った。私は、それなら北瀬海だろうと言った。私が、朝起きて、すぐにスポーツ紙を見たのは、このためでもあった。やはり、輪島の相手は北瀬海だった。

これより前、貴ノ花が負けていることがわかっていた。また、若三杉が勝っていることもわかっていた。だから、長部さんは、半分は不機嫌で、半分は上機嫌という変な状態だった。

*

『倫敦』へ行くまえには、おなじ横浜の『八十八』というウナギ屋にいた。そこへ到着したのは四時頃である。このウナギ屋のソラ豆がばかにうまくて、丼で何度かおかわりをした。五月場所ということになると、ソラ豆でなくてはいけない。

私は、気の知れた同士で、たとえばウナギ屋の二階で、午後の四時頃、それもちょっと暑い日に、西日を避けながら飲むというのが好きだ。

長部さんは、青森県の人が貴ノ花、貴ノ花と言って騒いだのは数年前のことで、いまでは若三杉のほうが人気があるかもしれないと言った。また、貴ノ花は青森県で育ったのではないとも言った。私は、なるほどと思い、うまいことを言うと思った。いくらか負け惜しみという感じがあるが、言っていることはその通りだと思った。

私たちは、七時半まで、そこにいた。もう少し飲みたいと思ったが、横浜は不案内であ

る。そこで、横浜市在住の柳原良平さんを呼びだしたのである。
私は禁酒中の身である。しかし、梶山季之のことを思うと、半分ぐらいは、もうどうなってもいいやと思ってしまう。

*

十二時半から三時ごろまで、鎌倉の瑞泉寺にいた。梶山季之の三回忌である。
梶山の人気は死後も少しも衰えない。集まってくるメムバーがいい。驚くべきことだ。梶山の書物は、いまでもよく売れるそうだ。
梶山の命日の集まりは「梶葉忌」ときまったようだ。それでいいのだけれど、私は「積乱忌」も一案だと思っていた。
未亡人が、あるとき、私に梶山の着物を貰ってくれないかと言った。私は、それなら、その着物で、百人分の名刺入れをつくったらどうかと提案した。思いがけなく、瑞泉寺の受付で、その名刺入れを貰うことになった。不意に心が弾んでくるような、非常に嬉しいことだった。私は、自分の着物が百分の一になって戻ってきたような気がした。

相撲の帰り

五月十二日の木曜日に、相撲見物に行った。五日目である。

この日の午前中に、高橋義孝先生の奥様から電話があった。女房が電話口に出たが、先生の言伝(ことづ)てで、一時半までに来てくれということであった。一時半というのは、いかにも早過ぎる。何か相談事でもあるのかもしれないと思った。

私が先生の家に到着したのは一時四十分である。急に早く来いと言われたのだから、十分ぐらいの遅れは仕方がない。驚いたことに、先生のお召しかえは済んでいて、いまにも出掛けようとする気配があった。靴もそろえてあった。

「どうして、こんなに早くお出かけになるんですか」

「寿司屋へ寄っていくから」

私は、シメタと思った。実は朝から何も食べていないのである。それに、先生は、あれでなかなかウマイモノ屋を発見するのが上手なのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com